

# 幼児の発達と教育



## 一、幼児期における人格の発達

子どもの発達の姿を的確にとらえ、生育の条件がどのように後の人格形成に影響を及ぼすかを明らかにするために用いられる研究方法の一つに、縦断的方法とよばれるものがある。

これは同一の子どもを長期間にわたって研究の対象とし、繰り返して検査、測定、面接などを行なう方法である。この方法による研究はなかなか実行が困難であるから、それほど盛んに行なわれてはいない。しかし五歳のころに自立性が低いということが、同じ子どもが十歳になったときの自立性とのような関係があるのか、また、かりにその五年間に自立性の度合に変化がみられたとして、それはどのような条件によったのかというような問題を明らかにするためには、重要な方法であると考えられる。残念な

## 三 宅 和 夫

ことにまだこうした面での研究はあまりすすんでいるとはいえない。だから一人の幼児を見て、この子がやがてどんな青年になるかを予測することは現在のところあまり的確には行なえない。

しかし教育といういとなみは、本来、いつも先のことを見通して、現在どのような刺激を子どもに与えるべきかを考えて、それを実践していくべきものであるから、こうした行動の予測とということがもつとはつきりできるようにならないと、なかなか改善されないように思われる。親や教師の経験や勘だけで、子どもに働きかけるのではなく、もつと科学性を持った教育が幼児期からなされなくてはならないだろう。

さて前に縦断的研究はあまり行なわれていないと述べたが、アメリカではすでに三十年以上も前からこのようなところみがいくなされていく。そのうちのひとつ、オハイオ州にあるフェルス人間発達研究所で一九二九年以来行なわれている研究では、毎年

生まれたばかりの約十名の子どもを研究対象として、成人するまで追跡しているのである。すでに初期に研究対象となった数十人の子どもは成人期に入っているわけであるが、これらのひとびとについて集められた資料の分析の結果が数年前に公表された。

それによるとさまざまな人格特性、たとえば攻撃性、依存性、受動性、知的達成、社会的交渉の持ち方などについてみると、六歳から十歳のいわゆる学童期における特性は、二十歳から三十歳という成人期における特性を、かなりよく予測するものであるといふのである。これにくらべると三歳から六歳までのいわゆる幼児期における人格特性は、青年期や成人期における人格特性とそれほどはつきりとした関係はみられないといふ。

このような結果はどのように解釈されるであろうか。筆者は次のように考えてみたい。すなわち、学童期ともなるとかなり人格特性が固定化し、その変容の可能性の幅が小さくなってくるからそれにつづき青年期、成人期における人格特性との間に大きな差異がないものと思われる。それに対して幼児期においては、子どもの発達の变化の可能性が大きいと考えられ、この時期における環境条件のあり方によって人格特性のあらわれ方も大きく変わると思われる。

つまり幼児期における人格特性と後の人格特性との関係がそれほどないといふ前述の縦断的研究の結果は、幼児期の特性はいず

れ変化してしまうのだからあまり問題にする必要はないのだ、というように解釈されるべきではなく、むしろ幼児期においてどのような人格特性が形成されるかということ、その後のどの時期よりも重要だということの意味するものと考えられるのである。

それではどうして幼児期が、子どもの人格の形成にとって重要であるかを次に具体的に考えてみることにしよう。

## 二、行動の基準の獲得と人格の発達

子どもが三歳をすぎるところから母親との関係は、それまでとくらべるといちじるしく変化する。三歳以前であれば、賞罰によるところのしつけの仕方が重要なのであるが、三歳すぎからはこれに加うるに親との同一視というメカニズムが、子どもの発達にとって重要なものになってくるのである。同一視とは親と子どもが親密な一体関係にあるとき、親の考え方や態度あるいは行動基準を自己のものとしてとり入れることである。一般に幼児にとつて親—特にははじめのうちは母親—は権威のある存在であり、有能な人物として見られているから、子どもは自分もそのようになりたといと考えて、親の行動や態度を自己のものとしようとするわけである。五、六歳にもなれば男の子にとっては、父親が同一視の対象となり、さらに仲間や先生なども同一視のモデルとなってくるの

である。このような同一視のメカニズムによって子どもはさまざまな行動の基準を獲得していくのである。男の子が男の子らしく振舞うようになり、自分の行動を男らしさという基準に照らして考えるようになるなどはその例であろう。これはいわゆる性役割の基準の獲得ということである。またいま一つの例としては、自己の能力を評価する基準の獲得がある。これには五、六歳のころの仲間との集団生活ということも大いに関係あると思われる。この年ごろの子どもは競争して負ければくやしがり、うまく組み立てられないパズルをかんしゃくを起こしてこわしたりするが、こんな子どもが自己に対して設定した能力の水準に達しえなかったことの結果生じたことであると考えられよう。

もちろん行動の基準のすべてが同一視によって獲得されるものであるというわけではない。前述したように三歳ごろまでのしつけは賞罰による条件づけということが主であるが、排尿・排便の習慣に関する基準などは賞罰によるしつけの結果できてくるものであると考えられる。また三、四歳のころには、毎日、くりかえしてなされる家庭の中での経験によって、怒りの表出、攻撃の仕方、物の破壊、依存の仕方、泣き方などに関する基準が獲得されるが、ここにも親の与える報賞や罰がかなりの比重を占めていると考えられる。

さてこうしたさまざまな基準が獲得されてくる順序は今のところ

それほど確実にはわかっていないが、いずれにしても三歳から六歳ごろの時期における子どもの人格の発達にとって重要なことなのである。こうしたいろいろな基準をうまく獲得することができないことは、子どもの社会生活を困難にするであろう。また獲得された基準に違背することに対する不安から、この時期に特に多いいろいろな問題行動が生じるといことも、注目しなくてはならないだろう。たとえば男の子なのに男らしい行動や能力を欠いている子どもは、仲間の中に入ってあそぶことを躊躇するであろう。

一般に子どもは、不安に対していろいろな形の防衛策を講ずることになるが、これは、就学前期から、問題として登場してくるのである。臨床的な研究によって、この時期にいろいろな恐怖症 (phobia) が多いことが明らかにされているが、これは、この時期における基準の獲得の問題と大いに関係があると考えられるので、今後よく検討すべきだと思うのである。

いずれにしても三歳から六歳ごろの時期が、行動の基準の獲得にとって重要であるとすれば、われわれは、子どもたちに彼らが学習をしやすいような条件を整えてやることが重要であろう。前述したところから明らかと思うが、三歳ごろに獲得される基準は比較的には個人的なものであり、五、六歳になってくると社会的なものだんだんと多くなってくる。つまり、家庭の中で獲得さ

れるものから、集団(社会)の中で獲得されるものへという発達の  
変化がある。だから最初は家庭の中における親の行動や態度が特  
に重要であるということになり、年齢とともに家庭外の集団の持  
つ重要性が増してくるわけである。のぞましい同一視のモデルの  
存在する集団、愛情と一貫性ある規律の保持されている集団が必  
要となってくるのである。そしてそのような集団は幼稚園や保  
園の中にしか考えられないであろう。家庭から集団への移行とい  
う観点からして前述したような基準の学習のためにも子どもの集  
団は、はじめはあまり大きくない方がよいわけである。

小学生ともなれば四十人、五十人もの集団生活がよいとして  
も、幼稚園や保育園ではそれよりはかなり小さい集団でなくては  
ならない。三、四歳なら十五人前後、五、六歳でも二十人から二  
十五人ぐらいがよいだろうと思われる。集団に入れさえすれば、  
スムーズに基準が獲得されると考えるのは間違っている。特にこ  
のごろのように一人っ子や二人きょうだいが大半を占めるようにな  
ってくれば、家庭において集団の基準を身につけてくることは  
以前よりは、はるかに少ないと考えなくてはならないから、この  
集団への移行の問題は十分に検討の余地があると思うのである。

### 三 知能の発達と人格特性

これまで幼児期における人格の発達という問題を中心にして考  
えてきたのであるが、就学前期における知的発達という問題も忘  
れてはならないことであると思われる。ところで知的発達という  
ことは、人格全般の発達ということと切りはなして考えてよいも  
のなのであろうか。それともそこにはどのような関係があるのだ  
ろうか。これはこの時期の教育ということを考える上から重要な  
問題であると思われるので、すこしく検討してみたいと思う。

一般に幼児期の知能程度と青年期や成人期になってからの知能  
程度との間にはある程度の相関がみられるということが、これま  
でのいろいろの研究によって明らかにされている。しかし、それ  
はあくまで多人数についての資料を統計的にまとめて処理した結  
果なのであって、個人個人について検討してみれば、かなりさま  
ざまな傾向がみられると考えられる。幼児のころにはあまりぱっ  
としなかったのに、やがて中学、高校のころになると、非常に優  
秀になるといような例をわれわれは経験的に知っている。また  
その逆の例も少なくない。

こうしたことを組織的に研究した例としては前述のフェルス人  
間発達研究所の縦断的研究がある。この研究の対象となつたのは  
一四〇名の子どもで、出生より成人までにわたつての発達のな諸  
変化が逐年的に資料として整えられている。そのうちとくに知能  
の発達に関しては、三歳より十二歳に至るまでの毎年の知能が測

定されているが、これを個人別にみると、年ごとに知能指数が上昇していく子どもがみられる一方に、年ごとに下降していく子どももある。また、十年の間にそれほど変動しない子どもあることが明らかになった。これだけの結果では特に目新しいものとはいえないが、この研究ではこのような知能指数の変動とどのような人格特性との間に関係があるかが検討されているのである。つまり一方において毎年行動観察が行なわれ、それによって人格特性の評定が行なわれていたのである。その結果、知能指数の変動と人格特性との間にかなりはつきりとした関係があることがわかったのである。

すなわち、知能指数が上昇した子どもと下降した子どもをくらべてみると、前者の方は自立性の度合が高く、競争意識が強く、忍耐力もあり、言語にあらわれる攻撃性の度合も高いというのである。

筆者も就学前の時期から小学校卒業までわたる七年間について、約七十名の子どもを対象として、毎年知能検査、行動観察などを実施して逐年的資料を収集しつつあるが、就学前後の数年間における知能指数の変動に注目して、特に知能指数の上昇した子ども二十四名と、特に下降した子ども二十四名とについて比較してみたところ、自立性や達成の動機において知能指数の上昇したグループの方がかなり高い評定値を得ているという結果を得た。

このような研究結果について考えてみると、知能の発達ということは、それだけを取り上げて問題にすることができないものであり、知能の発達を促進するためには人格特性も問題にしなくてはならないということになるであろう。幼児期において調和のとれた人格発達ということが大切なのはこのような観点からみても明らかである。

ところで、このように知的発達と関係の深い自立性などという人格特性の形成ということは、親の態度やしつけ方などの影響が大きいと考えられる。筆者はかつて六歳の男児二十名、女児二十名と、その母親を対象としてこの問題を検討したことがある。母親に対してはいろいろな自立に関するしつけなどを、子どもが何歳ぐらいのときにどの程度にしたかを面接してしらべたのである。たとえば「母親の助けを求めないで、新しいことでもすんでやってみる」「自分の持物を自分で始末する」などについて、子どもが何歳のころに、どんなやり方でしつけを始めたかをたずねたのである。子どもの自立的行動や知的課題と取りくむときのがんばりの程度などについては、行動観察がなされたのである。

この結果子どもが三歳から六歳の間に、前述したような要求を比較的多く、かつ早期にしたと答えた母親の子どもには、自立性や達成の動機の高い者が多いということが明らかにされた。

さらにこれらの子どもについてはその後毎年、知能検査や行

動評定が行なわれているが、一般に六歳時において自立や達成の行動の評定点が高かった子どもは、その後、知能指数の上昇の傾向が見られるようであり、この点については今後くわしく検討してみたいと考えている。

いずれにしても、これらの研究の結果からみて、一見すると知能の発達とはあまり関係のないような親のしつけ方や態度が、実際は知能の発達の基礎にある大きな条件となっているということが明らかなるようである。つまり親のしつけ方や態度が子どもの人格特性の発達に影響を及ぼし、そのようにして形成される人格特性が知能の発達に影響を及ぼすというわけなのである。このような関係を考えると、知的な発達ということを問題とするあまり、親が子どもにつきっきりで知識をつめ込もうとするような態度、子どもを大事にしすぎて自主的行動の機会を与えないようなしつけ方などは、子どもの知的な発達を阻害するような人格特性をつくりあげこそすれ、決して知的発達のためにはならないのだということが明らかであろう。

前節においても指摘したことであるが、最近のように、一人っ子や二人きょうだいがほとんどというようになってくれば、どうしても親の保護過剰や知識偏重の傾向が強くなってくる。このまま放置しておいては、前節において述べたような幼児期にこそ果たさなければならぬ課題が、そっちのけになってしまうおそれ

なしとはいえない。このようなあやまった傾向をすこしでも阻止し、正しい方向にむけるのが、幼稚園や保育園の果たす重要な役割であると考えるが、むしろ、それを助長しているようなところも無いわけではないようである。

残念なことは、幼児期における子どもの行動からはっきりと将来を予測することができただけの段階まで、まだ研究が進んでいないということである。本稿においてはそういう視点に立って、これまでのいくつかの研究の成果を中心に考えてみたが、これらの研究もまだまだ不完全なところが多い。今後の学問の進歩と幼児教育の水準の向上をのぞむこと切なるものがある。

(北海道大学)

### 倉橋惣三選集第四巻 発売中

フレール館発行 定価 700 円

#### 内 容

- ☆保 育 案
- ☆短 言…・子どものための人形  
・窓・この秋 他
- ☆戦 中 小 篇…・保姆諸君と語る  
・おもちゃ 大学 他
- ☆戦 後 小 篇…・小問答「とんでもない」  
・保育の味 他
- ☆論 説…・彼らもまた美を求む  
・幼稚園の新使命 他
- ☆実 際 篇…・系統的保育案解説  
・幼稚園でしていること 他
- ☆初期の著作…・新しき心 他
- ☆作詞・書簡・揮毫
- ☆あとがき

第 1, 2, 3 巻 (各 700 円) も増刷発売中